

ITP 派遣報告書

博士後期課程 3 年 柴田 瑞枝

1. 派遣先：ボローニャ大学大学院（イタリア）
2. 指導教員：和田忠彦先生、マルコ・アントニオ・バッゾッキ先生
3. 派遣期間：2013 年 3 月 27 日～2013 年 12 月 28 日
4. 派遣概要：

水準が高く、伝統あるボローニャ大学大学院のイタリア学科において自らの研究分野についての知見を深め、東京外国語大学大学院とボローニャ大学大学院の共同学位制度を利用して、イタリア語による博士論文を執筆することが最終的な目標です。派遣中は、大学や公立・市立の図書館に通い、日本国内では参照することの難しい資料の蒐集に努めたほか、自身の研究内容と関連が深いと考えられるシンポジウムやセミナーには、積極的に参加するよう心がけました。

5. 研究成果と今後の課題：

今回の ITP による派遣先ボローニャには、2013 年 2 月までの短期派遣 EUROPA プログラムで既に滞在していたので、住居などの基本的な環境は派遣開始時から整っており、また、大学においても、それほど複雑な手続きを必要としなかったため、到着後直ちに研究に着手することができました。

6 月末になって、東京外国語大学大学院とボローニャ大学大学院の間において共同学位制度に基づく協定が結ばれ、指導教員との話し合いのもと、2015 年 3 月の博士論文提出を目指すことが確認されました。ITP 派遣は 2013 年 12 月 28 日を以て終了しましたが、今後も日本でイタリア語による博士論文執筆を続け、指導教員の先生方には定期的にもメールでご指導を仰ぐことになっています。

派遣期間中は、ボローニャ大学側の指導教員、バッゾッキ先生の講義「イ

タリア近現代文学」に通い、その他の時間は、図書館や自宅で資料を講読し、博士論文の下地とするためのメモをまとめました。また、短期派遣 EUROPA の派遣時に応募した小論文『深層生活』にみるモラヴィアの「声」-女性一人称と対話の叙述形式が、「イタリア学会誌第 63 号」に掲載されることとなったので、それに際して、審査員の先生方のご忠告に沿っていくつか修正を加えるなどの作業を行いました。

派遣当初から、できるだけ迅速に博士論文の執筆にかかる所存ではありましたが、書き出しの方法や、細かな構成などについて頭を悩ませたり、難解な資料の講読に時間を取られたりしたことで、実際に執筆を開始するまで時間を要しました。しかし、書き始めてみると自然と論点が定まってきて、どうしたら論理的に自説を述べられるか、そのためには具体的にどのような資料が必要なのか、ということが次第に明確になってきたように思えます。

10 月頃、バッゾッキ先生から「帰国前にある程度まとまった量の論文を提出するように」との指導があったので、2013 年 12 月の初旬までに博士論文「20 世紀イタリアにみる変化する女性像-男性作家による女性一人称作品を中心に」（仮題）の第 1 章第 1 節を執筆し、イタリア人によるネイティヴ・チェックを経て指導教員に提出しました。

第 1 章では、イタリア文学や日本文学を含む世界の文学において、男性作家による女性一人称という叙述形式にはどのような例があるか、またどのような意義があるかといった点を探り、また、20 世紀イタリアにおける女性像が、それまでの主に「男性の手」による女性像から、女性作家の「直接表現」による女性像の介入によっていかに変化するのか、という点を明らかにしたいと考えています。男性作家による女性一人称作品を主題にした先行研究は極めて少なく、資料の蒐集にも苦労しましたが、ボローニャの所蔵書籍の豊富な図書館とその水準の高いサービスに助けられて、まずは満足のいく成果を残せたと思います。とりわけ、博士論文の第 1 章を執筆するにあたって、ヨーロッパ近現代小説の父と呼ばれる 17 世紀イギリスの作家ダニエル・デフォー（『モル・フランダーズ』、『ロクサーナ』）やサミュエル・リチャードソン（『パミラ』、『クラリッサ』）らについても調査しましたが、ボローニャの市立図書館で、イタリア語のみならず英語の資料も参照できたことは大変有意義でした。

今後の課題は、何よりも博士論文の執筆のペースを上げることです。ボローニャへの派遣中とは違って、イタリア語の資料へのアクセスが困難になるので、決して容易ではないと思いますが、自ら各章や節の執筆期限を設け、共同学位の取得を目指して計画的に研究を続けていきたいと考えています。